

## W-2-1

### 西夏語とムニャ語の方向接辞

荒川慎太郎（東外大 AA 研）・池田巧（京大人文研）

#### 1. 西夏語・ムニャ語の動詞句

西夏語は 11-13 世紀，中国西北部に存在した言語であり，現在では死語と化した，西夏文字による豊富な文献が残る。ムニャ（木雅）語は中国四川省で話されている活きた言語で，かつて西夏語との親近性が議論されていた。西夏語もムニャ語もともに，動詞の方向を指示する 6~8 種類の接辞群を有し，音形・方向が共通するものもあれば異なるものもある。ともに，方向を意識せず特定の動詞と結びついたり，接辞の母音交替(?)により方向指示以外の機能を派生させる現象が見られる一方，ムニャ語の動詞は基本的に必ず接辞を伴うが，西夏語の方向接辞は必須ではなく，ほとんど完了態マーカーとなっていて，方向指示は二次的な機能であるといった相違点も見られる。

#### 西夏語の動詞句のおおまかな構造

{方向 or 疑問-否定・禁止-指示代名詞}接辞-**動詞(語幹)**-助動詞-接辞-助詞

※□内が動詞の必須要素。{ } 内の要素は，一つの動詞句内で共起しない。

#### ムニャ語の動詞句のおおまかな構造

**方向接辞**-**動詞(語幹)**-接辞-助動詞-述詞 ※□内が動詞の必須要素。

#### 2. 西夏語・ムニャ語の方向接辞

##### 2.1 種類と音形，およその「方向」

西夏語の方向接辞は，上下方向以外の方向，初頭子音 d- の接辞の関係について，各研究者で見解が分かれる。報告者の見解と，ムニャ語で音と意味の近いものを併記すると以下ようになる。<sup>1</sup>

動作の方向	西夏語の接辞（文字・推定音と略号）	ムニャ語の接辞
「上へ」	𐽀 <sup>1</sup> a?- 1A	tu <sup>33</sup> -
「下へ」	𐽁 <sup>1</sup> na:- 1N	ne <sup>33</sup> -
「こちらへ?」	𐽂 <sup>1</sup> kI:- 1K	
「あちらへ?」	𐽃 <sup>2</sup> wI:- 1W	
「上流へ」		ɣu <sup>33</sup> -
「下流へ」		ɦa <sup>33</sup> -
「話し手に向かう」		ngu <sup>33</sup> -
「話し手から離れる」(?)	𐽄 <sup>2</sup> da:- 1D	t <sup>h</sup> e <sup>33</sup> -
方向不明?	𐽅 <sup>2</sup> dI:- 1D'	
方向性なし(?)	𐽆 <sup>2</sup> rI:r- 1R	q <sup>h</sup> u <sup>33</sup> -
「回る」		ru <sup>33</sup> -

西夏語の例。同一主語の一文で，異なる接頭辞による完了態が見られることもある。

(01)

𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉  
<sup>1</sup>kI: [khu:] <sup>1</sup>ngwI r <sup>1</sup>dzon <sup>2</sup>da: [wi] <sup>2</sup>tha <sup>2</sup>no <sup>2</sup>wI: [to]  
 Prefl 迎える 皇后 Prefl 成る 皇子 Prefl 出る

(彼女は)迎えられ，皇后となり，皇子を産んだ(聖立 5)

<sup>1</sup> 西夏語の推定音は荒川(2014)による。肩文字の 1, 2 はそれぞれ声調「平声」，「上声」を，母音の I は中舌狭母音 [i] を表す。例文，下線は接頭辞，囲みは動詞(類)。言及する要素に適宜波線。ムニャ語は池田(2013: 372)を報告者が再配列した。

## 2.2 西夏語の例

### 1A 𐵑<sup>1</sup>a? 「上へ」

𐵑<sup>1</sup>a?-は登場例が多く、比較的「上向きの動作」が確認できる。

(02)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>1</sup>a:r<sup>2</sup>dzwo:<sup>2</sup>gu<sup>1</sup>ti:q<sup>1</sup>a? 𐵑<sup>1</sup>sho  
 八 人 共 願い Prefl 起す

八人が共に願いを起こして、(莫 285 窟 TM089)

(03)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>1</sup>tser<sup>2</sup>lu<sup>1</sup>a? 𐵑<sup>1</sup>enq<sup>1</sup>wi:  
 品 座 Prefl 上げる ～する

官品を上げられる(聖立 5)

### 1N 𐵑<sup>1</sup>na: 「下へ」

登場例は多くないものの、「下向きの動作」に関係することが多い。

(04)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>1</sup>tl:<sup>2</sup>gl:<sup>2</sup>lhwl:<sup>2</sup>dzyuq<sup>1</sup>na: 𐵑<sup>1</sup>lenq

一 夜 急な 雨 Prefl 降る

ある夜急な雨が降って(Galambos 2015: 145)

(05)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>2</sup>nga<sup>1</sup>pI:<sup>2</sup>no:<sup>1</sup>ko<sup>1</sup>li:<sup>2</sup>ne:<sup>2</sup>ji?<sup>1</sup>wi:<sup>2</sup>lyuq<sup>1</sup>na: 𐵑<sup>1</sup>tser<sup>2</sup>ga:r<sup>2</sup>nga

私 昔 歌利 王 ～によって 身 Prefl 割く Suf.1sg

私が昔、歌利王によって身を割かれた《私は》(金剛)

### 1K 𐵑<sup>1</sup>kl: 「こちらへ?」

登場頻度は高いが、動作の方向が明確でないものも多い。

(06)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>2</sup>jyan<sup>1</sup>chyu<sup>1</sup>e:<sup>1</sup>kl: 𐵑<sup>1</sup>gyu<sup>2</sup>dza:r

衆生 を Prefl 滅度する  
 衆生を滅度した(が)(金剛)

(07)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>2</sup>ngu<sup>2</sup>ne:<sup>1</sup>phan<sup>1</sup>kl: 𐵑<sup>1</sup>o<sup>1</sup>kuq<sup>1</sup>kuq

以て 涅槃 Prefl 入る 後々  
 ……以て、涅槃に入って、(楡 25 窟 TY087)

𐵑<sup>1</sup>kha 「～の中」、𐵑<sup>2</sup>u 「～中」のような位置格標識とともに見られる例も散見される。

(08)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>1</sup>nglr<sup>1</sup>kha<sup>1</sup>kl: 𐵑<sup>1</sup>yar

山 間 Prefl 留まる

山間に(入って)留まる(聖立 5)

(09)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>2</sup>la<sup>2</sup>u<sup>1</sup>kl: 𐵑<sup>1</sup>li:q

墓 中 Prefl 行く

墓(の中)に(入って)行く(聖立 5)

### 1W 𐵑<sup>2</sup>wI: 「あちらへ?」

登場頻度も高いが、やはり動作の方向が明確でない例が多い。

(11)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>2</sup>dzwo:<sup>2</sup>wI: 𐵑<sup>1</sup>dyu? 𐵑<sup>1</sup>no

人 Prefl 生まれる 後

人が生まれ(出て)のち、(聖立 5)

(12)

𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑 𐵑  
<sup>2</sup>nga<sup>1</sup>pI:<sup>2</sup>no:<sup>1</sup>tser<sup>2</sup>war<sup>2</sup>wI: 𐵑<sup>1</sup>ylr<sup>2</sup>ka<sup>1</sup>wi:

私 昔 節枝 Prefl ばらばらにする

私が昔、節枝をばらばらにされた(金剛)

(12)と(05)は類似する内容・動詞だが、方向接辞の使い分けの理由は判然としない。

### 1D 𪛗<sup>2</sup>da:- 「話者から？」 1D' 𪛗<sup>2</sup>dl:- 方向不明？

さまざまな動詞に前接されるが、特定の方向が確認出来る例は少ない。法律文書などでは 𪛗<sup>1</sup>sa: 「殺す」、𪛗<sup>2</sup>si: 「死ぬ」のような、割合良くない意味の動詞に前接される(Arakawa2012: 63)。

(12)  
 𪛗<sup>1</sup>ti:q<sup>2</sup>thi: 𪛗<sup>2</sup>da: 𪛗<sup>1</sup>wa:  
 食 食べる Prefl 終わる  
 食べ物を食べ終わって(金剛)

(13)  
 𪛗<sup>1</sup>geu: 𪛗<sup>1</sup>chya: 𪛗<sup>2</sup>da: 𪛗<sup>1</sup>ta:  
 野 上 Prefl 去る  
 (彼は)野に走り去った(聖立 5)

接頭辞 𪛗<sup>2</sup>dl:- は「盗む、獲る」など「何かを強引、不法に得る」のような動詞に後続するか。

(14)  
 𪛗<sup>2</sup>the: 𪛗<sup>2</sup>so: 𪛗<sup>2</sup>dl: 𪛗<sup>1</sup>co:  
 どのように Prefl 盗む  
 どのように盗んだか(天盛 3)

### 1R 𪛗<sup>2</sup>rl:r- 特定の方向無し？

さまざまな動詞に前接されるが、特定の方向が確認出来る例は見られない。

(15)  
 𪛗<sup>2</sup>nga 𪛗<sup>2</sup>zi? 𪛗<sup>1</sup>mwe 𪛗<sup>2</sup>ri:r 𪛗<sup>2</sup>a 𪛗<sup>2</sup>rl:r 𪛗<sup>1</sup>ldeng  
 私 慧 眼 得る に Prefl 来る  
 私が慧眼を得る(所)に来て(金剛)

(16)  
 𪛗<sup>2</sup>wl:r 𪛗<sup>2</sup>ji? 𪛗<sup>2</sup>rl:r 𪛗<sup>1</sup>yeu  
 文 業 Prefl 学ぶ  
 (彼は)文業を学んだ(聖立 5)

𪛗<sup>1</sup>tshe: 動詞「説く」など発話関係の動詞に前接される例が多い。𪛗<sup>2</sup>rl:r 𪛗<sup>1</sup>tshe: 「説いた」(金剛)、𪛗<sup>2</sup>rl:r 𪛗<sup>1</sup>niq 「述べた」(聖立 5)、𪛗<sup>2</sup>rl:r 𪛗<sup>1</sup>kwat 「叫んだ」(聖立 5)

## 3. 方向接辞をめぐるさまざま

### 3.1 方向接辞からの派生

西夏語もムニャ語も「方向接辞の母音部分が交替し、異なる機能の接辞となる」という、現象だけ見れば類似する部分がある。しかし音変化の方法や機能は全く別物である。西田(1989)で示された「方向接辞」、及びそれらの接辞から形態変化を経て成立した接頭辞(願望・希求を示す)の組は次の通り。

#### 西田(1989: 418-419)による動詞接頭辞のセット

来源となる方向		接頭辞 1	略号	接頭辞 2	略号
「上の方に向かって」	┌	𪛗 <sup>1</sup> a?-	1A	𪛗 <sup>1</sup> e:-	2E
「下の方に向かって」	└	𪛗 <sup>1</sup> na:-	1N	𪛗 <sup>2</sup> ne:-	2N
「こちらの方へ(話者の方に向かって)」	┌	𪛗 <sup>1</sup> kl:-	1K	𪛗 <sup>1</sup> ke:-	2K
「あちらの方へ(話者から離れて)」	└	𪛗 <sup>2</sup> wl:-	1W	𪛗 <sup>2</sup> we:-	2W
「水源の方へ(内側に向かって)」	┌	𪛗 <sup>2</sup> da:-	1D	𪛗 <sup>2</sup> de:-	2D
「下流の方へ(外側に向かって)」	└	𪛗 <sup>2</sup> rl:r-	1R	𪛗 <sup>2</sup> ryeqr'-	2R

#### 同じく西田による、接頭辞 1 と接頭辞 2 の派生・機能の関係

構造	機能
接頭辞 1+動詞語幹	方向指示→アスペクト(完了態)表示
接頭辞 2 (<接頭辞 1 + 'e:') + 動詞語幹	願望・希求

仏教文献から願望・希求と考えられる接頭辞 2 の用例を示す。

(17)

𑖀 𑖄 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀  
<sup>1</sup>ryur <sup>1</sup>tha <sup>1</sup>tsyer <sup>2</sup>ngo:r <sup>2</sup>ngo:r <sup>2</sup>ryeqr' <sup>1</sup>me: <sup>2</sup>nga  
諸 仏 法 一切 Pref2 集める Suf.1sg  
諸仏法一切を私は集めよう(華嚴 77)

一方、ムニャ語では、「自動詞の方向接辞の母音交替によって他動性が示される」ことがある。  
<sup>h</sup>t'e<sup>33</sup>-ku<sup>55</sup>「凍る」Vi → <sup>h</sup>t'i<sup>33</sup>-ku<sup>55</sup>「凍らせる」Vt, <sup>tu</sup><sup>33</sup>-ts<sup>h</sup><sup>55</sup>「沸く」Vi → <sup>t</sup><sup>33</sup>-ts<sup>h</sup><sup>55</sup>「沸かす」Vt

### 3.2 方向表示機能の衰退? と動詞との結合

西夏語仏典などでは、文脈から「方向」より「完了態」を表すと考えられる例が一般的である。

(18)

𑖀 𑖄 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀  
<sup>2</sup>nga <sup>1</sup>tha <sup>2</sup>rI:r <sup>1</sup>tshe: <sup>1</sup>wo? <sup>1</sup>a? <sup>1</sup>tse: <sup>2</sup>nga  
私 [仏 Prefl 説く 義]o Prefl 悟る Suf.1sg  
私は仏が説いた(ことの)理を理解しました(金剛)

また、「接頭辞に後続する動詞には傾向がある」＝「特定の動詞と結びつく傾向に」

#### 方向接辞と結びつきやすい動詞 (Arakawa 2012 の統計より)

- |                        |                              |
|------------------------|------------------------------|
| 1A: 上げる, 昇格させる, 終える    | 2E: 上げる, 昇格させる, 終える, 解く, 告げる |
| 1N: 鎮める, 減らす           | 2N: 鎮める, 落とす                 |
| 1K: 属する, 示す, 遣わす, 入る   | 2K: 告げる, 同じにする, 集める, 調べる, 到る |
| 1W: 出る, 送る, 越える        | 2W: 取る, 導く, 探し求める, 退く        |
| 1D: 明らかにする, 失う, 殺す, 死ぬ | 2D: 得る, 与える, 成す, 殺す, 罰する     |
| 1D': 取る, 盗む            | 2R: (何か) する, 住む, 従う, 行く, 来る  |
| 1R: (何か) する, 行く, 話す    |                              |

同じ動詞に、同一の初頭子音を持つ接頭辞 1, 2 が付く例が多いか (動詞と方向性の関連?)

𑖀 <sup>1</sup> a?- 1A - 𑖀 <sup>1</sup> e:- 2E	𑖀 <sup>2</sup> wI:- 1W - 𑖀 <sup>2</sup> we:- 2W
𑖀 𑖀: 𑖀 𑖀 「起こす」	𑖀 𑖀: 𑖀 𑖀 「取る」
𑖀 <sup>1</sup> kI:- 1K - 𑖀 <sup>1</sup> ke:- 2K	𑖀 <sup>2</sup> rI:r- 1R - 𑖀 <sup>2</sup> ryeqr'- 2R
𑖀 𑖀: 𑖀 𑖀 「打つ」	𑖀 𑖀: 𑖀 𑖀 「(何か) する」

一方、ムニャ語の動作動詞において、方向接辞の付加は自由度が高いようであるものの、やはり組み合わせが特定化しているものが見受けられる。

fi<sup>33</sup>-ndzu<sup>55</sup>「食べる」 cf. fi<sup>33</sup>-「下流へ, 外へ, 後ろへ」

### 3.3 方向接辞と他の接辞の共起

西夏語では Кепинг (1985: 176-177)に示されたように、方向接辞と動词语幹の間にほかの要素、黠<sup>1</sup>ldi:q「また」、慨<sup>1</sup>mi:「～しない」、戮<sup>1</sup>ti:「～するな」が挿入されることもある。

(18)  
 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍  
<sup>1</sup>ryur<sup>2</sup>dzwo:<sup>2</sup>chya'<sup>1</sup>sa: <sup>1</sup>'a? <sup>1</sup>ldi:q <sup>1</sup>pi:q  
 諸 人 意 殺す Prefl また 審判する  
 諸人は意(により)殺しました審判される(天盛 1)

(19)  
 ...𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍  
<sup>1</sup>lwi: <sup>2</sup>nI: <sup>1</sup>kI: <sup>1</sup>ti: <sup>2</sup>bo  
 種 等 Prefl Proh 罰する  
 …種などを罰することなかれ(天盛 11)

以下では二つの要素（否定接頭辞・指示代名詞的接頭辞）が挿入される。

(20)  
 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍  
<sup>1</sup>te: <sup>2</sup>ny'i? <sup>1</sup>tswyuq<sup>2</sup>myeqr' <sup>2</sup>rI:r <sup>1</sup>mI: <sup>1</sup>chI <sup>2</sup>weng:  
 もし 罪 触れる 者 Prefl Neg Dem 遣わす  
 もし罪を犯した者があれば、(それを)遣わすことはできず(天盛 9)

### 3.4 方向接辞と格標識（奪格・到格）との関係

西夏語にはもともと奪格「～から」、到格「～まで」に相当する格標識がない。動詞「生じる」「到る」、あるいはそれに「～を、～に」に相当する格標識を付加した形式で格を表す。

西夏語格標識の形式による分類(荒川 2010)

形式	一般的な格(の名称)	意味
𐰽𐰺𐰍 - <sup>1</sup> e:	属格, 对格, 与格	～の, ～を, ～に
𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> 'a	对格, 与格, 場所格	～を, ～に
𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> ji? <sup>1</sup> wi:	具格	～によって
𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> ngwu	具格	～を以て
𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> ri:r	共格	～と
𐰽𐰺𐰍 - <sup>1</sup> byu	共格	～に従い, ～故に
𐰽𐰺𐰍 - <sup>1</sup> su	比較格	～より
𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> do	場所格	～の所で
𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> u	場所格	～内に, ～内で
𐰽𐰺𐰍 - <sup>1</sup> kha	場所格	～中(に)
𐰽𐰺𐰍 - <sup>1</sup> chya	場所格	～の上に
𐰽𐰺𐰍 - <sup>1</sup> khyu	場所格	～の下に
(𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> 'a)𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup> sho	奪格	～から
(𐰽𐰺𐰍 - <sup>2</sup> 'a)𐰽𐰺𐰍 <sup>2</sup> nI:	到格	～まで

場所を起点とする表現は、動詞 𐰽𐰺𐰍 <sup>1</sup>sho「生じる」を用いる。

(21)  
 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍 𐰽𐰺𐰍  
<sup>2</sup>zyIr<sup>1</sup>nya: <sup>1</sup>sho <sup>2</sup>su<sup>1</sup>ceu <sup>1</sup>pyen<sup>2</sup>kyeu <sup>1</sup>ra:r <sup>2</sup>nI: <sup>2</sup>khu:'<sup>1</sup>me  
 水 黒 発する 肅州 辺境 遠い 等 監視する  
 黒水(地名)から肅州(までの)遠い辺境などを監視し、(仁負)

「時間」「場所」に関しても、起点に対応する着点表現が存在する。動詞 纒<sup>2</sup>nI:「到る」から生じた「～まで」が使われる。

(22)

纒 纒 纒 纒 纒 纒 纒 纒 纒 纒 纒 纒  
 1'dzyu 2'waq 2'wi 2'wiq 1'chyu 2'daq 1'chya 2'zyIr 1'nya: 2'nI: 2'lenq 2'a 1'sho 2'gl: 1'wi  
 仁負 城 守る 仕事 上 水 黒 到る 来る に 発する 夜 朝  
 仁負は城を守る仕事で黒水まで来てから、昼夜… (仁負)

このように、奪格専用の格標識(“from”のような)が見られないのは、西夏語に本来、方向指示機能を持つ動詞接頭辞が豊富にあったためという可能性もある。ダパ語などに類似する特徴がある。

#### 4. 小結

西夏語とムニャ語は、方向接辞という要素に限れば、一見、1) 音形式・機能に類似するものがある、2) 特定の方向を指示しない、特定の動詞と語彙的に結合する、3) 方向接辞の母音交替による派生形を有する、などの特徴が類似する。しかしいずれの点も、実際には大きく相違する現象であることが確認できる。同様に、TB 語派の個別言語の「方向接辞」も、概略的には似ているものが存在するものの、具体例を詳細に検討すると異なることがあるため、その扱いには注意が必要である。

#### 出典略号

金剛: 金剛般若波羅蜜多經 {荒川 2014}, 華嚴: 大方広仏華嚴經 {荒川 2011}, 天盛: 天盛旧改新定禁令 {Arakawa 2012}, 聖立: 聖立義海 {Arakawa 2014}, 仁負: 仁負文書(No. 2736) {荒川 2010}, 莫: 莫高窟 {荒川 2017}, 楡: 楡林窟 {荒川 2017}

#### 略号

Dem: demonstrative (pronoun), Neg: negation, O: object, Proh: prohibit, Pref1/2: prefix series 1, 2, Suf: suffix, 1sg: first person singular

#### 参考文献

- 荒川慎太郎 2010 「西夏語の格標識について」『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』(澤田英夫編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 153-174
- \_\_\_\_\_ 2011 「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴經卷七十七訳注」, *Journal of Asian and African Studies* 81: 147-305
- \_\_\_\_\_ 2014 『西夏文金剛經の研究』, 松香堂
- \_\_\_\_\_ 2017 「敦煌石窟西夏文題記銘文集」『敦煌石窟多言語資料集成』(松井太・荒川慎太郎編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 241-333
- 池田巧 2013 「ムニャ語の述詞と文」『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2: 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』(澤田英夫編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 365-390
- 西田龍雄 1989 「西夏語」『言語学大辞典』中巻(亀井孝ほか編著), 三省堂: 408-429 {西田 2012 に修訂再録}
- \_\_\_\_\_ 2012 『西夏語研究新論』, 松香堂
- Arakawa, Shintaro 2012 "On the Tangut Verb Prefixes in "Tiansheng Code", *Тангуты в Центральной Азии: Сборник статей в честь 80-летия профессора Е. И. Кычанова*. Москва, Издательская фирма «Восточная литература»: 58-71.
- \_\_\_\_\_ 2014 "On the Tangut verb phrase in *The Sea of Meaning, Established by the Saints*," *Central Asiatic Journal* 57: 15-25
- Galambos, Imre. 2015 *Translating Chinese Tradition and Teaching Tangut Culture: Manuscripts and Printed Books from Khara-khoto*, Berlin & Boston, Walter de Gruyter,
- Кепинг, Ксения Б. 1985 *Тангутский язык. Морфология*, Moscow: «Наука».

本発表は科研費(基盤 B 課題番号 16H03414)「「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相」(代表: 荒川慎太郎)の研究成果の一部である。